

會津八一全集



第四卷

會津八一全集

第四卷

(第一回配本)

昭和三十三年十月十五日 印刷
昭和三十三年十月二十三日 發行

會津八一全集 第四卷

定價 三九〇圓

著作權者 會津蘭子

發行者 栗本和夫

東京都中央區京橋二ノ一

印刷者 山元正宜

東京都文京區柳町二六

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二ノ一
電話京橋(56)五九二二番
振替東京三四番

(三晃印刷・小泉製本)

編輯者例言

一、この第四卷『短歌 上』は、秋艸道人會津八一が短歌作品の既發表未發表のすべてを網羅することを期したが、まづその既發表分の底本としては、『會津八一全歌集』（昭和二十六年三月中央公論社刊。以下これを全歌集本と呼ぶ）を用ゐた。目次の「南京新唱」（一頁）より「山歌」（三四六頁）に至る部分がこれに當る。但し「洪濤」（一六九頁）五首、「病閒」中に含まれる「ある青年雜誌より時局の歌を問はれて」（二三七頁）五首、「天長節」（二三九頁）三首の計十三首は、道人の歌集『山光集』の昭和十九年九月の初版本にひとたび載つて、同二十一年六月以後の改訂本に削除されたものであるが、ここには再び元の形にしておいた。

一、「くわんおんのしろきひたひにやうらくのかげうこかしてかぜわたるみゆ」（二八頁）は、全歌集本では「帝室博物館にて」（四頁）の中に入つてゐたが、このたびは「法輪寺にて」（二八頁）の中に移した。この位置の方が正しいことは、道人みづから『渾齋隨筆』『自註鹿鳴集』に説くところである。

一、既發表分（以下これを主部と呼ぶ）の表記法は、全歌集本の語分け形式を踏襲した（前記の復原追加十三首の表記もこれに準じた）。但し本巻では、全歌集本の誤植を改めることの外

に、語分けの手段と第一行から第二行への移り具合とについて、いささか整備するところがあつた。語分けの點では、全歌集本を熟讀の末廣く見渡して道人の遺志の在るところを歸納的に見極め、その上で一種の基準を設けて、これによつて處理することとした。前後矛盾せぬ一方、規則に捉はれて不自然に陷ることをも避けたつもりである。行移りの點では、第一行を——字間の空白をも一字と見て——三十字と限定し、これに納まらぬ時にはじめて第二行に移ることとした。かういふ表記法では當然下部が不揃ひになることを免れないが、それにしても前版よりはかなり改善された筈である。

一、「菊久榮」(三四八頁)「新年同詠船出應制歌」(三四九頁)「鐘銘」(三五〇頁)の計三首は、全歌集本以後の發表歌で、その表記もまた語分け形式に従つた。

一、以上の主部については、新たに索引を作製して讀者の活用に資した。

一、「補遺」(三七六頁以下)は、道人が生前歌集を編むに際し、ほとんど全部その資料中にありながら、自ら廢棄したものである。されば主部とは別個に取扱ふことを妥當とし、語分け表記とせず(一つには、漢字まじりの表記が多く、語分けにする必要がないからである)、且つ索引にも加へなかつた。要するに「補遺」は全集といふものの性質上、ただ參考としてここに一括しておいたまでのことと觀るやうに一般に希望したい。

一、「補遺」に關しては、別にその部に「凡例」を示した。

一、本卷の歌數は、主部八百八十六首、補遺百首の總計九百八十六首となつた。

一、道人が自著諸歌集のために筆を執つた序跋の類は一切第五卷『短歌 下』に収載することとする。

二、他の事項は卷末の「編輯後記」にゆづる。

目次

編輯者例言

南京新唱	九九首
山中高歌	一〇首
放浪吟草	六三首
村莊雜事	一七首
南京餘唱	四二首
震餘	八首
望鄉	七首
斑鳩	一二首
旅愁	一九首

一	元	三	七	九	九	六	一〇〇
---	---	---	---	---	---	---	-----

小園 九首

南京續唱 一四首

比叡山 一二首

觀佛三昧 二八首

九官鳥 一二首

春雪 一〇首

印象 九首

榛名 一八首

雁來紅 一六首

草露 四首

京都散策 一二首

觀音院 二首

洪濤 五首

一〇九

一一三

一二八

一三三

一三五

一四〇

一四四

一五〇

一五六

一六一

一六三

一六八

一六九

望遠 五首

一七一

紅日 七首

一七三

溷濁 八首

一七六

歌碑 八首

一七九

大佛讚歌 一〇首

一八二

鐘樓 六首

一八六

平城宮址 一三首

一八九

香藥師 五首

一九三

偶感 五首

一九五

山本元帥 七首

一九七

芝草 六首

二〇〇

海上 五首

二〇三

春日野 七首

二〇五

西の京	一一首	二〇八
霜葉	一二首	二一三
白雪	九首	二一八
明王院	一一首	二二二
病閒	四一首	二二六
天長節	三首	二三九
校庭	一〇首	二四〇
彩痕	五首	二四四
街上	四首	二四六
泰山木	五首	二四八
山精	五首	二五〇
土くれ	七首	二五二
このごろ	四首	二五五

紀元節	一首	二五七
霜餘	六首	二五八
火鉢	五首	二六〇
閑庭	四五首	二六三
銅鑪	五首	二七五
若き人々に寄す	五首	二七七
焦土	八首	二七九
雲際	七首	二八二
柿若葉	九首	二八五
鉢の子	四首	二八八
寸緑	二首	二九〇
山鳩	二一首	二九一
觀音堂	一〇首	三〇〇

柴賣	六首
一路	三首
爐邊	一四首
櫓の火	五首
松濤	五首
幽暗	四首
をぐさ	三首
櫻桃	八首
錦衣	五首
自畫題歌	八首
あさつゆ	二首
盆梅	五首
夜雪	六首

三〇三
三〇五
三〇七
三一一
三一二
三二五
三二七
三二九
三三〇
三三四
三三八
三三九
三四一

松の雪 五首

三三三

良寛禪師をおもひて 五首

三三五

うみなり 六首

三三七

天皇を迎へて(一) 五首

三四〇

天皇を迎へて(二) 三首

三四三

伐柳 六首

三四三

山歌 四首

三四六

菊久榮 一首

三四八

新年同詠船出應制歌 一首

三四九

鐘銘 一首

三五〇

索引

三五一

補遺

凡例

南京新唱 拾遺(一) 西遊咏艸 抄 一二首

書翰の歌(一) 二首

山中高歌 拾遺 二首

南京新唱 拾遺(二) 八首

放浪險草 拾遺 一四首

書翰の歌(二) 一首

村莊雜事 拾遺 十二首

印象 拾遺 十一首

南京餘唱 拾遺 一首

三七六

三七八

三八四

三八六

三八七

三九一

三九八

三九九

四〇三

四〇六

小園 拾遺 一首

四〇七

南京續唱 拾遺 一首

四〇八

龜田鵬齋の歌に和す 一首

四〇九

日記の歌 一首

四一〇

手帖の歌 三三首

四一一

編輯後記

南京新唱

明治四十一年八月より
大正十三年に至る

春日野にて

かすがのにおしてるつきの
ほがらかにあきの
ゆふべとなりけるかも

かすがののみくさをりしき
ふすしかのつのさへ
さやにてるつくよかも

うちふしてものもふくさのまくらべをあしたの
しかのむれわたりつつ

つのかるとしかおふひとはおほてらのむね
ふきやぶるかぜにかもにる

こがくれてあらそふらしきさをしかのつのひびき
によはくだちつつ

うらみわびたちあかしたるさをしかのもゆるまなこ
にあきのかぜふく